

第四十一回全国酪農青年女性会議酪農発表大会

全国の優良事例発表からを学ぶ

七月十二・十三日 神戸国際会議場

560名
参加

乳牛の能力アップは牛の観察にあり!!

(江本洋子さん)



広酪メンバーズクラブ(井上正芳委員長)は、委員長を含む会員五名と事務局から加藤祐一技師・伊藤泉技師の七名が全国酪農発表大会に参加し、全国各地の優良事例等を学びました。「酪農経営発表の部」と「意見体験発表の部」それぞれの農林水産大臣賞に輝いたのは、何れの部も北海道の発表者でした。

西日本酪農青年女性会議からは、酪農経営発表の部に徳島県の江本洋子さん、意見・体験発表の部では、鳥取県の山下敏子さんが発表されました。

この内、江本さんは昨年、三次市酪農振興会が企画した酪農研修会で講師に招いた渡邊徹先生が指導にあたられた酪農家で、その経営状況を紹介します。

持続性のある

牛づくりを目指して
仲間とともに達成した
一万kg牛群

江本洋子さん(徳島県)



■経営状況

労働力はご夫婦・ご子息の三名の家族経営。昭和三十年頃から酪農をはじめ、現在は経産牛頭数五十七頭。

■規模拡大から経営悪化

昭和五十四年に四十三頭規模の牛舎を新築。平成十年には経産牛が四十頭を超え、その頃から長期不受胎、四変、分娩後の事故増加、食い止り、低カル、廃用牛の増加など繁殖成績も悪化し、経営状況も悪化してしまった。

■藁をもつかむ思いで勉強会に参加

平成十三年頃。徳島県酪農協の講習会で渡邊徹先生の「儲かっていますか?」の勉強会を聞く機会と、同時に親戚の酪農家からの誘いもあって、夫婦同伴を条件とする参加に迷いながらも、「悩みが解消できるのならば」と嫌がる夫を無理矢理連れて勉強会に参加された。

■結果が出ず。やめようかとも...

最初は給餌方法を変え、飼槽と牛床等を改善されたものの、翌年、分娩した牛は次々に病気になる、結果にも結びつかず、勉強会も何度も止めようと思われた。

しかし、思いとどまり、「とにかく牛を観察すること」と強調される言葉と指導に感化され、毎日五分の観察から始められた。牛を見て、昨日との変化、調子はどうかを徹底して観察された。



メンバーズクラブの窓

■違いの分かる酪農家を目指して

夫婦共に牛が好きであったことが功を奏して、少しの変化も気づくようになられた。牛舎で牛がどのような状態かを勉強する内に、二人で積極的に勉強会に参加するようになった。また、仲間の牧場を見ることによって、育成管理の違いに気づき、育成を基本とした牛づくりを模索された。その成果は二年以上も後に現れ、餌を食い込める牛づくりが出来、乳量も少しずつ増加して行った。

■牛群検定のススメから

ご子息が学ぶ農業大学校からの勧めで牛群検定に参加。勉強会では成績表の見方を教わり、牛の観察やデータの活用から牛が健康になるための飼料給与や管理について毎月検討し、その晩から直ちに実践された。

参加者が互いに指摘し合う切磋琢磨の関係による情報交換から、勉強会に参加した平成十三年の経産牛一頭あたり乳量六千九百kgから、平成十八年には一万kgを超え、五年で三千kgも増加することが出来たとあった。



■高乳量牛の増加で管理が楽に

一頭あたりの乳量が増加すると共に、四十kg以上の高乳量を続ける牛が増え、牛群管理が良くなるに連れて、四十kg以上の乳量を五か月以上続ける牛が多くなった。四十kg以上を五か月以上続けた牛の経産牛の分娩頭数に対する割合は年々増加し、四十kg台の乳量が続続することによって同じ乳量の牛が多くなり、管理がしやすい牛群を揃えてこられた。

■成績向上を実現された

三つのポイント

①飼料給与

飼料の栄養バランスや消化のことを考慮し、粗飼料を一頭ずつ計量、反芻開始前に濃厚飼料給与といった飼料給与の順番、タイミングを変えたことにより、採食量が増加した。

②カウコンフォートの実施

ステンレス飼槽、二頭式連続水槽、ウレタン性の牛床マット、暑熱対策として送風機は二頭に一台を設置。これによって、疾病の減少とストレス軽減による飼料吸収率が向上した。

③牛を健康に

分娩後の立ち上がりも良好で、泌乳ピークの持続につながる事が出来た。

■今後の展望

江本さんは、「今後も現状を維持し、高乳量の持続性の長い牛を揃える経営を続けていきたい。また、現在は購入飼料中心の経営体であるが、昨今の飼料高も鑑み、河川敷の飼料作付けや地元コントラクター利用組合が取り組んでいるコーンサイレージの利用など自給飼料生産にも取り組み、自ら家族の

健康のことも考え、自動給餌機、北海道預託等、ゆとりある経営にしたい」と述べられ、発表の最後に「今ある酪農経営、そして、頑張れるのは渡邊先生や支えてくれる仲間がいてくれること」と感謝の言葉を添えられた。

江本さんの経営改善は、勉強会参加を一旦は断念しようと思いを巡らされたが、牛の観察を継続したことから、牛の変化を見いだすことができ、それが今の酪農経営に結びつき、仲間との切磋琢磨も加わり、成果をあげられている。

江本さんは、息子さんに経営移譲した後は酪農ヘルパーを利用して、これまで出来なかった旅行に行きたいと「ゆとりある酪農」を夢見て、今日も牛の観察を続けられていくものと思う。



広島からの参加者